

# 巻 頭 言

## 最終号の発行に寄せて

経営情報学部 学部長

齊 藤 実

平成6年4月、経営情報学部経営情報学科は、建学の精神に基づき経営と情報という異分野の実践的かつ学際的な学問を教授するため、小森博夫初代学部長のもとに創設されました。創設以来、本学部卒業生総数は、4,600名を超えるまでに達しました。しかし、四半世紀に及んだ本学部も平成最後の本年、平成31年3月をもって終りを迎えることとなりました。

経営情報学部は、当初より経営分野および情報分野の高い専門性をもった教授陣を中心にして、各分野の独立性も重視しつつ、両分野の融合を図るべく研究・教育を実践して参りました。今、思い起こせば、経営情報学部はまさに時代を先取りした学部であったと断言できます。その証左として、本学部発足初期においては、パソコンの普及という世の中の波にもうまく呼応して入試倍率も10倍を超え続けました。本学部の先駆的な働き掛けは、以下に縷々述べます通り、まさに現在、大学教育界で声高に叫ばれている方向性に見事に一致しているのです。

発足当初から本学部独自の大きな特色として、初年度教育重視の一環として八ヶ岳山麓で1泊2日の新入生研修を実施してきました。また、授業科目のひとつとしてインターンシップ（企業実習）を多くの学生に体験させました。東京・名古屋のIT企業を中心とした企業見学会も実施してきました。加えて、いち早くノートパソコン新入生全員に卒業までの4年間無償で貸与するという画期的な事業を本年度まで10年以上展開してきました。さらに、「経営情報特講」という外部講師中心の授業では、中央省庁の部長、経営行動研究学会の会長、KDDIなど大企業の幹部、ベンチャー企業の若手社長など多彩な著名講師陣を毎年招聘いたしました。外部の目新しい発想の講話を聴講した学生には大いに刺激になったと思われます。

アクティブな学びとして、創設当初から大学教育の王道の中心であるゼミナール活動を強力に進めて参りました。もちろん、3、4年生の「専門演習」であり、必修科目としてスタート致しました。その後、選択制になりましたが、この専門演習の履修率は90%以上と高いものでした。いわゆるゼミの重要性を先生方が学生に熱心に訴えた成果だと存じます。専門演習においては、学生が企業を個別に訪問して積極的にインタビュー調査を行ったこともありました。また、街頭やキャンパスでアンケートを取るなどゼミ生の自主的な活動が光りました。この専門演習の成果は、卒業論文であります。これと並行して「卒論発表会」も最終年度である本年度まで継続実施されました。

さらに、よりアクティブな学びとして、経営と情報を融合させた本学部ならではの時代に即した「経営実践」という名称の授業を展開して、企業とコラボレーションして幾つかの商品を学生が企画し販売するまでに至りました。また、山梨県主催の学生ビジネスプランコンテストにも積極的に参加し、多くの気概のある学生が企画立案して応募した結果、優秀賞を3回も勝ち取ることができました。受

賞プランの中には数社からの共同企業化の提案も受けたものもありました。

学生のキャリアサポートのため、IT 関係の各種資格の取得を目的として「情報キャリア支援室」を設置致しました。毎年、高い定評をもつ外部講師を招聘し、特別講座やサマースクールなどを精力的に実施致しました。これらは、もちろん正規の授業ではないのですが、熱心な多数の学生が参加しました。その結果、国家試験である IT パスポート試験や基本情報技術者試験の合格者を多数生み出しました。加えて、かなり高難度の応用情報技術者試験に合格する学生も輩出するに至りました。また、民間資格ではありますが、就職に非常に有利な MOS 試験の取得支援のため、本学部教員が試験監督の資格を取得して本学でのオンライン試験を可能にし、多数の合格学生を出しました。また、文部科学省後援 CG エンジニア検定についても、試験監督の資格を有する本学部教員により、本学での試験実施を可能にした結果、毎年合格者を出すことができました。さらに、現在注目度が高い情報セキュリティ関係の国家試験である情報セキュリティマネジメント試験に合格した本学部教員の熱心な指導のもと、情報セキュリティ関係の資格合格者も毎年学生の中から生まれました。以上のように、高度な資格を有する教員らと情報基盤センター職員の尽力の結果、毎年多数の学生が IT 関係の各種資格を取得するという成果を出し続けて参りました。このことは、確実に多くの学生の就職に貢献できたと自負しております。

これに加えて教授陣の専門ゼミナールを中心とした日頃の地道な少人数教育の実践の結果、県内外の多くの企業への学生の就職を果たしてきました。もちろん、NTT 東日本や JR 東海をはじめとする大企業にも多数の就職者を輩出してきました。特に、IT 関係企業への堅実な就職実績は本学部ならではの大きな成果です。また、県庁や市役所など公務員への就職も多数実現しています。さらに、より高度な学修を目指して大学院への進学者も定着してきおり、山梨大学をはじめとする国立大学大学院や早稲田大学などの有名私立大学の大学院への進学者も送り出してきました。

教授陣の研究活動も活発で、経営分野および情報分野で科研費を多数獲得しました。特に、総務省が企画した IT 関係の産官学協同研究に本学部の教授が応募した結果採択され、特別研究費としては多額の 1 億円を獲得し、その研究成果として画像認識ソフトウェアの開発と学術論文作成および特許出願を果たしました。これらの IT 関係の研究教育には、当然ながら情報基盤センターとの強力な連携は不可欠でした。

また、本学部の地元山梨企業への貢献活動として、10 年以上前から山梨県から多額の補助をいただき“アントレプレナー会”と称して、県内の老舗企業や若手ベンチャー企業の経営者約 30 名を会員とする地元密着型のビジネススクールをいち早く立ち上げました。この中から大きく成長した企業も誕生しました。また、山梨県や NTT 東日本山梨支店などの企業の経営コンサルティングの依頼も多数受託いたしました。

実践的な学生のスポーツにおいても本学部所属教員の熱心な指導のもと、ホッケー・水泳・柔道・サッカーなどの優れたアスリートを多数輩出してきました。特筆すべきは、本学初の実業団メダリストとなった水泳の鈴木聡美さんです。鈴木さんは本学部にて在学中にロンドン五輪に出場し、日本女子史上初となる 1 大会で 3 つのメダル（銀 1・銅 2）を獲得するという素晴らしい成果を挙げました。

さらに、平成 20 年度から本学部ではスポーツマネジメントという学際的な分野も新たに加えてきました。その教育研修の一環として、学生と教員が連携してヴァンフォーレ甲府などの地域スポーツへの積極的な貢献も続けて参りました。経営と情報を有効に活用することによってスポーツ経営や

イベントの成功に繋がられるのです。やさらに、ゲームの勝利にも大いに貢献できるのです。今後の更なる発展が期待される分野です。

数年前から目指していた本学部の将来スコープとしては、“第4次産業革命”の中心となる人工知能やビッグデータなどを基礎とするデータサイエンスの領域です。これは経営情報学の進化系と言えるでしょう。数理統計処理をマネジメントに活かすというデータサイエンスの流れは、予想通り今や本流となりつつあります。その証左として、幾つかの国立大学でも有名私立大学でも次々と関係学部や大学院が設置されています。この分野の研究・教育は、本学部と現代ビジネス学部と対等合併して新規に創設される『経営学部』においても経営情報学部からの流れの大きな本筋のひとつとして継続的に実践していく所存です。

いち早く時代の最先端を疾走してきた経営情報学部の名は、四半世紀をもって消えますが、教員ひとりひとりには臥薪嘗胆の志をもって『経営学部』という新たなフィールドで活躍していく所存です。新・経営学部においては、上述致しました経営情報学部発足当初から先駆的に実践してきた様々な事柄を、まさにリマインドしながら、ひとつひとつの試みを再構築し実行に移していくことになるでしょう。現在、大学業界におけるキーワードは“国際”と“情報”であると随所で叫ばれております。21世紀社会の国際化・情報化に貢献できる若者が、新規創設の『経営学部』で学び育ち、そして社会の第一線で活躍することを期待します。本年、ラグビーワールドカップという国際的なスポーツイベントが日本各地で開催されます。蹴り出された楕円形のラグビーボールが日本チームにとってより良い方向に跳ねるように、新たに誕生する『経営学部』という運命共同体が見事に進化発展を遂げることを祈念して、最後の経営情報学部・学部長の言葉としたいと存じます。

以上